

廣瀬淡窓とその世界

朝吹英二の血脈

原 千里

朝吹英二は、一八四九（嘉永二）年に豊前下毛郡宮園村（現在の大分県中津市耶馬溪町宮園）で、一五代続いた大庄屋朝吹家の次男として生まれた。男四人、女四人の八人兄弟であった。

英二は、幼年期に村上姑南に学んだ。村上は廣瀬淡窓の高弟で、漢学者であり医者。一八八〇（明治十三）年、第七代咸宜園主に就任した人物である。

英二は、満八歳のころ天然痘を患う。ひどい痘痕面だったという。十六歳にして米相場などを手懸けて「大胆」かつ「機敏」な商才を発揮した。中津の渡辺重春や白石照山に漢学を学び攘夷思想を持つ。入門簿によると、一八六八（慶応四）年九月一五日に咸宜園に入門。廣瀬林外に師事した。

その一生には「誰にもなびかぬ自由人」「独立自尊」の哲学が貫かれていた。この精神は福澤諭吉に学んだものと思われる。

英二の性格は、「豪放磊落」。多くの人々から愛された。

英二の長男常吉

英二は明治実業界の重鎮。三井、三菱の基礎を築いた。また、明治の政界を代表する岩崎弥太郎、福澤諭吉、大隈重信、犬養毅、尾崎行雄などと親交を重ねた。

常吉は、そのような父の長男として、一八七七（明治十）年、諭吉の邸内の一郭である今日の慶応義塾大学三田本部校舎内で生まれた。「常吉」という名前には「平民としての常識を大切にして欲しい」との願いが込められていた。諭吉の命名。

常吉は六歳で慶応義塾幼稚舎に入学。一八九六（明治二十九）年に慶応義塾を卒業すると、直ぐロンドン大学に留学。十九歳であった。ロンドン留学は、病弱ゆえに二年にすぎなかった。当時のロンドン留学は、上流社会においても極めて希なこと。

帰国後の常吉の生活は、あらゆる面で英国流。五人の子

一八七〇（明治三）年、大坂で福澤諭吉と初対面。その時、牛肉を食べ風呂でシャボンを使う諭吉の西洋かぶれに反発して「諭吉暗殺」を企てたが失敗。諭吉の人格や見識に触れ自分の愚かさを知り、一転して諭吉を師と仰ぐようになる。その後上京。福澤家の玄關番となり、慶応義塾に学んだ。同義塾を卒業。同出版社主任に任命され、『学問ノススメ』など諭吉の著作出版を数多く手懸けた。

二十六歳で、諭吉の姪（諭吉の姉婉の娘）澄と結婚。澄は、後日三井財閥を代表する中上川彦次郎の実妹。お茶の水女子師範学校の学生で十五歳であった。長男常吉、長女福子が誕生。

一八七八（明治十一）年、三菱商会に入社した。岩崎弥太郎に重く用いられ同会支配人となる。さらに、岩崎弥太郎、福澤諭吉、大隈重信などが立ち上げた我が国最初の貿易会社取締役兼支配人に就任。その後、鐘ヶ淵紡績（後の鐘紡）の専務取締役、三井工業部理事、三井呉服専務理事、王子製紙取締役、芝浦製作所監査役、東京商業会議所特別議員、鐘ヶ淵紡績会社相談役、王子製紙取締役会長、境セロロイド取締役、三井合名会社参事、三井銀行監査役、三井物産会社取締役、東神倉庫会社取締役などを歴任した。

一九一一（明治四十四）年に、引退。一切の役職を離れて骨董の収集に明け暮れた。六十九歳で急逝。

どもたちの教育は、特にそうであった。イギリス人家庭教師ミスリーによる英語教育が行われた。常吉の五人の子どものうち四人が欧米に留学。「そのことは、リベラルな考えを持つ常吉の影響である」と考えられる。

常吉は、千代田組の創立とその発展に尽力した。その後、三越呉服店の常務、さらに、帝国生命保険会社社長に就任。父英二同様、実業界で大きな働きをした。さらに、東京ロータリークラブ（我が国最初のロータリークラブ）や日本庭球協会の創立にも尽力。非営利社会活動である。

一九五五（昭和三十）年、七十七歳で病没。常吉の葬儀は、三越の社葬として行われた。遺言通り、花輪などが全くないとても簡素なものだった。「花輪のない葬儀」と、新聞報道された。「大企業の社長の葬儀としては当時極めて珍しいケース」だと言えよう。

常吉の五人の子どもたち

常吉には五人の子どもがいたが、特に三男の三吉とその妹登水子について詳しく述べていく。

三吉は、フランスに渡り、ジャンソン・サイイ高等学校（リセ）で歴史、文学、哲学などを三年間学んだ。その後、

ソルボンヌ大学（現在のパリ大学ソルボンヌ校）でフランス語・フランス文学や西洋美術・美学などの研究に取り組んだ。高校、そして大学と、六年間フランスに留学した。一九四五（昭和二十）年、当時の朝日新聞社専務石井光次郎の娘でピアニストの京と結婚。石井は、後に政界に転じて自由民主党幹事長、法務大臣、衆議院議長を歴任。京の妹好子はシャンソン歌手。共に東京音楽学校（現在の国立東京芸術大学）で学んだ。

一九四六（昭和二十一年）年、三吉は慶応義塾大学予科のフランス語専任講師となる。一九四九（昭和二十四）年、新制大学発足と同時に同大学法学部専任講師としてフランス語・フランス文学担当。教授として同大学を退職するまで、フランス語を教え、フランス文学の翻訳者として幾つもの作品を日本に紹介した。特に、一九五三（昭和二十八年）年に新潮社より出版されたジュネの『泥棒日記』の翻訳は、多くの人々に深い感銘を与えた。一九六八（昭和四十三年）年に文庫化され、今日までに四十三刷、約四〇万部が読み継がれてきた。妹登水子との共訳もある。だが、三吉は翻訳者であることに、ある種の引け目を感じていたのかもかもしれない。「『創作者』と『翻訳者』は次元が違う」と思っていたと推察される。翻訳の傍ら他大学や日仏学院でも教鞭をとった。さらに、美智子妃殿下にも約二年間フ

福された結婚であった。だが、この結婚生活は長くは続かなかった。離婚後、登水子は新天地を求めて三吉の手引きでフランスに渡った。

一九三六（昭和十一年）十月、登水子はパリの全寮制の女学校に入学。以降フランス語の習得に没頭した。その甲斐あってソルボンヌ大学の外国人学生のためのフランス文化講座の試験に合格。三吉同様、貪欲に知識を吸収していた。また、多くの文化人たちと交流。乾いた砂地が水を吸うように新しい世界を吸収していった。そうした生活が約三年。

一九四四（昭和十九）年、登水子は建築家志望の青年と結婚。由紀子を出産。この由紀子は、後にソルボンヌ大学に学んだ。

第二次世界大戦が終わり、登水子は無一文から再出発。銀座でバラックを借りて店を出した。自分の持ち物売り払い、その資金にあてた。

一九五〇（昭和二十五）年五月、四歳の由紀子を父母に預けてフランスへ向かう。二度目のフランス留学。再婚の夫とは別居。離婚は決定的であった。

同年七月、登水子はパリ到着。フランス滞在は半年の予定であったが、パリ到着一年後に、由紀子呼び寄せて長期滞在の準備に入った。生活手段は、新聞や雑誌記事のラ

フランス語を個人教授。

三吉は、国連教育文化機関（ユネスコ）の文化局次長も務めた。パリの本部に勤務すること六年。それは、激務の日々であった。

ユネスコ勤務を終えて、三吉は慶応義塾大学に復職した。一九六五（昭和四十）年、同大学教授に昇任。一九七八（昭和五十三）年に、フランス政府から学術功労勲章を授与された。

同大学を退職後、東海大学特任教授に転じた。晩年の三吉は、書齋に引きこもる日々であった。家族との会話もほとんどなかったという。

二〇〇一（平成十三）年、没。八十七歳になる直前のことであった。その生涯は「独立自尊。孤高を愉しみ、フランス語の教授やフランス文学の翻訳。それらを通して、フランス人の心を日本人に紹介することに捧げた一生」と言えよう。一步引いた控えめの人生でもあった。

三吉の妹登水子

登水子は、三吉の三歳違いの妹。女子学習院を中退後、十七歳で結婚。相手は、三十一歳の財閥の御曹司。皆に祝

イターであった。さらに、洋裁学校で必死に学んだ。洋裁学校での勉強とライター稼業の傍らフランス文学の翻訳を手懸けた。フランソワーズ・サガン（一九三五―二〇〇四）の処女作『悲しみよ こんにちは』が新潮社文庫として出版され、ベストセラーとなった。

この作品の翻訳を切っ掛けに、登水子は翻訳者、そして作家として多くの作品を世に出していくことになる。

二十世紀最大の思想家サルトルとそのパートナーポーバルが来日した際、案内役として同行したのが登水子と三吉。案内役、通訳、さらに公開討論における同時通訳者として二人に寄り添った。

二〇〇〇（平成十二）年、登水子は日仏の懸け橋となった功績により、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与された。フランス政府最高の勲章である。

二〇〇三（平成十五）年、夫のアルベルトが亡くなると、登水子は日本へ完全帰国。日本に戻って来てからは、穏やかな日々を送った。二〇〇五（平成十七）年九月二日、八十八歳で帰らぬ人となった。その葬儀は、弔辞もない簡素で静かなものだったという。

登水子の生涯は、「独立自尊」「自由と決断」という言葉で言い尽くせよう。また、それは朝吹家の理念でもある。そして、「『自らの意志と才能』で人生を拓いた国際的視

野を持った女性。当時の日本人女性には希な存在。その生き方は、日本人女性に希望を与えた」と言っても過言ではない。

同じ家に生まれ育ち、同じようにフランスを愛し続けた三吉、登水子兄妹。だが、その人生はあまりに対照的。孤高の世界で学問や芸術に没頭し人生を全うした三吉。強い意志と才能で実社会を生き抜いた登水子。共に、誰にも左右されない人生を生きた。

他の三人の兄弟

常吉の五人の子どもたちは、それぞれが強い個性を持ち、その才能と努力によって人生を切り開いていった。

長男英一は、木琴奏者のパイオニアで木琴の普及に大きな貢献をした。慶応義塾大学経済学部を卒業後、三井信託に就職。八年後、父常吉が創立した千代田組に取締役経理部長として入社。また、木琴奏者としてNHKのラジオ番組に頻繁に出演。敗戦から十二年間木琴奏者の第一人者として活躍した。

一九五〇（昭和二十五）年、東京木琴クラブを創設。父常吉の死後、千代田組の取締役として実業界に復帰。さら

に、東京木琴クラブを日本木琴クラブとして全国組織に発展させた。五人兄弟の中では唯一海外留学の経験がない。

次男の正二は兄英一同様、早くから音楽に興味をもった。また、テニスにも熱心。十八歳のとき、母磯子と英一に連れられてアメリカ旅行をした。本場の音楽を聞くのが目的。一九三四（昭和九）年十月、来日した世界的なチェロ奏者エマーヌエル・フオイアーマンに見出されて欧米に音楽留学することになった。帰国した正二は「新しいチェロ独奏曲集I・II」を編纂。チェロ初心者のためのものであった。四男四郎は、慶応義塾普通科を卒業した十七歳のときイギリスに渡った。一九三三（昭和八）年三月のことであった。一九三五（昭和十）年、ケンブリッジ大学に入学。一九三八（昭和十三）年、建築学を修め同大学を卒業。その一年後に帰国。敗戦後に清水建設に二年間勤務。同社を退職後、建築事務所を立ち上げた。オランダ、ベルギー、フィンランド、など八カ国の大使館を設計。朝吹建築事務所は、四郎の弟子が引き継いだ。

三吉の次男亮二とその娘真理子

亮二は、詩人であり慶応義塾大学法学部のフランス語・

フランス文学の教授。詩人として、鮎川賞も受賞している。

亮二は、五歳でフランスに渡り、当地の公立小学校に入学、全校児童の中で日本人は亮二だけだった。さらに、学業成績は極めて優秀。

一九六三（昭和三十八）年、十一歳で帰国した。暁星小学校に入学。フランス語を忘れないようにとの配慮から、フランス人教師に指導を受ける。この教師は、パリソルボンヌ大学を卒業した若き日のフランソワズ・モレシヤン。一度帰国するものの、再来日。NHKのフランス語講座の講師を務めるなどで、すっかり有名になった。その人柄は、人々の記憶に新しい。

亮二は同大学文学部でフランス文学を専攻した。同大学院に進み、その後は同大学法学部でフランス語を教えている。

亮二の一人娘真理子は、慶応義塾大学文学部（国文学専攻）・同大学院文学研究科に学んだ。同大学岩松教授門下生で近世歌舞伎を研究。

二〇一〇（平成二十二）年、ドウマゴ文学賞を最年少で受賞。二〇一一（平成二十三）年、『きことわ』で第一四四回芥川賞を受賞。弱冠二十六歳であった。その研ぎ澄まされた言語感覚は、特筆に値する。職業作家として、大きな活躍が期待されている。

これまで述べてきたように、朝吹家の人々の華麗なる血脈には驚く。

英二の実弟範治（野依家の養子となる）の曾孫野依良治は、名古屋大学教授で二〇〇一（平成十三）年にノーベル化学賞を受賞している。

本稿では、その血脈のほんの一部に触れたに過ぎない。

主な引用・参考文献

大西理編『朝吹英二君伝』（大空社）
石村博子著『朝吹家を生きる』（角川書店）